

人吉海軍航空基地の歴史

第二次世界大戦前、このミュージアムの周囲は、松林と花畑に覆われ、鳥のさえずりだけが聞こえる、九州南部の丘陵にひっそりと佇む人家のまばらな平地でした。この地域は数百年前に戦いの場となったと言われていわれていますが、そうした出来事の痕跡は見当たりません。1943年の秋にすべてが変わるまで、この場所はずっと辺鄙な日本の田舎でした。

日本と連合軍との戦争は、ほぼ2年間にわたって激しく続いていました。日本の太平洋における初期の快進撃は、前年のミッドウェー海戦とソロモン諸島の戦いによって勢いが失われていました。日本軍はゆっくりと後退しており、ガダルカナル島に配備された部隊が撤退し、またイギリス軍がビルマの領土を奪還し始めていました。さらに、アメリカの潜水艦は日本の船舶にこれまで以上に致命的な被害を与えていました。

ほとんどの日本人はこうした事態の深刻さを知りませんでしたが、日本の軍指導者たちは日本の本土防衛のための計画を立て始めました。そして1943年11月、この場所で、九州南部の他の海軍基地への中継および補給基地として機能する飛行場の建設が始まりました。

作戦の開始

長さ 1,500 メートルの滑走路と本部、訓練施設、兵舎の建物を備えた人吉海軍航空基地は 1944 年 2 月に運用が開始しました。その後 1 年間は、この基地は下は 16 歳の 10 代の兵士 6,000 人以上を収容し訓練を行うといった基地の役割を果たすことができました。この頃は進軍する連合軍はまだ迫ってきてはおらず、展示されている写真には熱意あふれる訓練生の一団が餅つきや観兵式などを行う様子が写っています。

しかし、1945 年 3 月までに国内戦線の状況は悪化しました。3 月 10 日の米軍機による東京大空襲では、一夜にして 10 万人以上の住民が命を奪われ、100 万人が家を失いました。南の硫黄島では、日本軍が兵力で負けつつも島を米海兵隊の上陸から必死に守っていました。3 月 18 日、戦闘の波は人吉基地にも訪れました；14 機の米軍機が施設を攻撃し、飛行場に損害を与え、建物を破壊し、地元の村民 4 人を含む 13 人が亡くなりました。

地下潜伏

4 月には、本土防衛が日本の軍事戦略の焦点となりました。沖縄は連合軍によって徐々に制圧され、日本各地の多くの場所と同様に人吉基地も再び米軍爆撃機の攻撃を受けました。基地は、「赤とんぼ」として知られる九三式中間練習機を操縦する特攻隊員の訓練場に変更されました。火山岩には大きな地下トンネルが掘られ、防空壕、兵舎、魚雷工場として使用されました。6 月に状況が悪化すると、航空訓練は中止され、残った航空兵は地元の民間

人とともに、日本本土での侵略軍との最終決戦に備えて白兵戦の訓練を受けました。

しかし、その侵略は起こりませんでした。8月6日に広島、8月9日に長崎に原爆が投下され、そのすぐ後の8月15日に連合国の要求に屈した旨を伝える昭和天皇の発表が放送されました。戦争が終わったのです。

平和への回帰

人吉基地の多くの軍事文書や軍服、その他の資料は、終戦直後に焼却されました。そこに駐留していた元軍人の証言によると、入隊者はすぐに復員しましたが、処理のために数か月間残留していた人員もいたそうです。1945年11月の時点で、人吉地区には約700人の占領軍が駐留していました。占領後、基地の建物の一部は学校から牛小屋に至るまで様々な用途に転用され、地下トンネルはしばしば地元住民によって倉庫として使用されました。

思い出の管理

戦後70年を迎えた2015年、地元の郷土史家が、基地の役割を明らかにする文書を発見しました。それらは、巨大なトンネルや滑走路（現在はミュージアムに続く真っ直ぐな道路となっています）を含む基地施設について説明しています。錦町は2018年、トンネルなど現存する基地の遺構を案内するひみつ基地ミュージアムを開館しました；遺構には、ミュージアムの2

キロ北にある部分的に修復された軍門や松油生産工場の廃墟などが含まれています。